

ホドの構造と解釈

—比較相関構文におけるホドの項の選択—

東寺祐亮

(九州大学大学院)

toji.yuske1986@kyudai.jp

キーワード：日本語、統語論、ホド、ARGUMENT

1. はじめに

1.1. 問題提起

日本語には(1)のように、「**P**ほど**Q**」という形式を持つ構文がある。

- (1) a. [P 走れば走る]ほど、[Q 疲れる].
b. [P 投げれば投げる]ほど、[Q 疲れる].

(1a)は「走る」の程度と「疲れる」の程度が比例する解釈になり、(1b)は「投げる」の程度と「疲れる」の程度が比例する解釈になる。このように、「**P** ホド **Q**」という形式の文は、概略、**P** が表す度合いと **Q** が表す度合いが比例するという解釈になる。以下、本論文では、このような構文を比較相関構文と呼ぶ。

上の例を見る限り、**Q** の度合いと比例としているのは、**P** の主要部の度合いであるが、常にそうであるとは限らない。以下の(2)では、(**P** の主要部が表す度合いと **Q** が表す度合いとが比例している解釈も可能であるが) 別の要素が **Q** の度合いとの比較の対象になっている解釈も可能である。

- (2) [ポスターを[PP[DP[A 高い]]ところ]に]貼れ]ば貼るほど、見えにくくなる。
[石居 2008: 254, (27)]

(2)の解釈は、「貼れば貼るほど見えにくくなる」という解釈が成り立ちづらいからだろうか、「ポスターの位置が高いほど、見えにくくなる」という解釈であり、この場合「高い」度合いと「見えにくくなる」度合いとが比例する解釈になっている。また、(3)は、「時間が遅いほど住民が文句を言う」という解釈と、「遅くにたくさん走るほど住民が文句を言う」という解釈がある。

(3) [電車が[[遅く]まで]走る]ほど、住民が文句を言う。

[石居 2008: 254, (27)]

(2)とは異なり、(3)では「走る」と「住民が文句を言う」の比例関係も、「遅く」と「住民が文句を言う」の比例関係も可能である。つまり、P の主要部でなくとも、ホドの比較の対象になりうるのである。

このように、比較相関構文では、比べられているものの構造的な位置が大きく異なる要素を比べることができる。このような解釈は、どのような過程を経て得られるのか、それがホドの語彙的な性質とどのように関わるのかを明らかにするのが本論文の目的である。

1.2. 先行研究

比較相関構文については、これまで、奥津 (1980)、丹羽 (1992)、野呂 (2008) らによる意味や構文の反復形式における指摘があった。たとえば、奥津 (1980) は、比較相関構文のホドが[+proportion]を持ち比例関係を作る性質があること、また、P と Q には(4)の「原因+ホド+結果」という因果関係があることを指摘している。

(4) a. [+proportion]:[P (食べれば) 食べる]ほど[Q 太る]。

b. [P 原因]ホド[Q 結果]

[奥津 1980: 162, (34b)]

丹羽 (1992)は、副助詞の取り立て用法も程度用法もどちらも量を表す表現であることに注目している。

(5) a. 太郎ぐらい来るんじゃないかな。 [丹羽 1992: 95, ⑥]

b. この怪獣、背丈は超高層ビルぐらいある。 [丹羽 1992: 94, ③]

丹羽 (1992)は、(5a)ではグライが event に量性を見出し、その中から来そうな人を太郎が代表することで取り立てる働きを持っており、(5b)ではグライが対象からその量性を取り出して比べることによって程度を表す働きを持っていると主張している。このような対象から量性を取り出す性質は、ホドにもあり、他の副助詞ばかり・ダケにもあるとしている。

野呂 (2008)は、「V スレバ V スルホド」の動詞反復形式を持つ構文とその解

積の関係に注目して、「V スレバ V スルホド」「V ニ V」「V ダケ V」の動詞反復形式を持つ構文は事態が反復する解釈をもつという点を指摘した。

川端 (2002)は、ホドの程度用法について、「P ほど Q」の解釈が成り立つための P であるための条件に注目している。「P ほど Q」の P は Q であると認定するための到達目標（価値基準・実現してほしい程度の基準）を表しており、この P は具体的な程度ではなく、Q であるための基準であると主張している。

井本 (2000)は、ホド句には程度用法だけではなく、事象回数用法、動作量用法など修飾対象を量化する性質があることからホドの数量詞的性質を指摘し、修飾対象との相互作用からホド句の諸用法が生じていると主張している。

また、Culicover and Jackendoff (1999)は、英語の Comparative Correlative は統語と意味が一致していないと分析している。統語的には、C1 と C2 は IP か CP の並列的な節である一方で、意味的には、C1 が従属節となり C2 が主節としての力を持つとしている。

(6) [IP/CP [C1 the more you eat] [C2 the less you want]]

[Culicover and Jackendoff 1999: 547, (6)]

英語の Comparative Correlative は日本語に翻訳すると比較相関構文として訳される。本論の分析と、Culicover and Jackendoff (1999)が指摘する節関係に類似点が見られるものの、Comparative Correlative と比較相関構文は、本論文では別の現象であると考えている。¹

このように、比較相関構文そのものは、これまでも記述されてきたことがあったが、その統語的な側面については、必ずしも十分な検討が行われてきたわけではない。構造的な観点から議論を行っているものに、石居 (2008)がある。石居 (2008)の分析については、2章で詳しく吟味する。

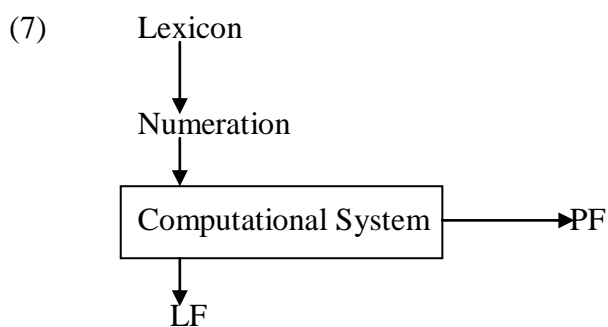
本論文の構成は、以下の通りである。1章の残りの部分では、前提とする枠

¹ 分析に関連しうる現象として、比較構文がある。英語の比較構文は、Bresnan (1973), (1975)や Kennedy and Merchant (2000), Kennedy (2002)において、Comparative Deletion(CD) Construction や Comparative Subdeletion (CSD) Construction についての分析がなされている。たとえば、Kennedy (2002)においては、CD は overt movement と deletion が関わっており、CSD には covert movement が関わっていると分析されている。また、日本語の比較構文では、空演算子との関連で分析している Kikuchi (1987)や Ishii (1991)に対して、上山 (2004)では、空演算子の移動が関わるものとかかわらないものがあるということが議論なされている。また、Beck et al (2004)の日本語比較構文の分析を受けて、Hayashishita (2009)では、意味論的議論がなされている。しかし、本論文では比較構文への言及はしていない。

組みを概観する。2章では、比較相関構文を分析している石居 (2008)の分析を紹介し、3章で石居 (2008)の問題点を挙げる。4章では、本論文の分析を提案し、本論文の分析に問題がないことを示す。5章では、結論と今後の課題を述べる。

1.3. 前提とする枠組み

本論文では、基本的に Chomsky (1995)以降の一連の著作で提唱されているミニマリスト・プログラムの立場に立っている。ミニマリスト・プログラムにおいては、文生成の過程は、概略、(7)のような流れになっている。



Lexicon には、各々の語の情報が収められている。Lexicon からいくつかの語が選択され、取り出された語の集合としての Numeration が形成される。Numeration は Computational System への入力である。Computational System において、Numeration に含まれる語を組み合わせて、全体として一つの構造を構築する。この語を組み合わせる操作は Merge と呼ばれる。Chomsky (1995)では、Merge を(8)のように述べている。

- (8) Merge operation takes a pair of syntactic objects (SO_i, SO_j) and replaces them by a new combined syntactic object SO_{ij} . [cf. Chomsky 1995: 226]

以下では、Ueyama (2010)、上山 (2011)の表記法を採用する。

(9) Merge

- a. Numeration 内で、二つの要素 (Lexicon から出力された語彙的要素もしくは Merge によって作られた要素) α, β を選び、 α と β をつないで一つの構造物にする。



- b. 新しく作られた構造物は、その構成要素のどちらかを主要部 (head) とし、その要素は主要部としての素性を持つ。



本論文では、主要部とその投射をつなぐ枝を太線で表示する表記法を採用しているが、2章と3章においては、石居 (2008)の分析を提示するため、従来通り、範疇ラベルを持つ表示を用いることにする。

Numeration のすべての要素に対して Merge を適用させることによってつくられた構造表示から、文の「音」の側面の基盤となる表示 (PF) と文の「意味」の側面の基盤となる表示 (LF) とが派生する。Computational System においてつくられた構造表示から、PF と LF が派生するという事は、文の「音」の側面にも「意味」の側面にも、構造に基づいて決定される部分があるということである。特に「意味」の側面に関して言うと、文の「意味」には、Lexicon において指定されている語の意味の集積という側面だけではなく、構造が構築されることによって生じる側面もあることになる。もちろん、これらの2つの側面だけでは、文の「意味」を捉えるには不十分である。語の意味とそれらの構造構築によって生じる意味に、話者の「知識」を加えることで得られる「意味」もある。本論文では、文の「意味」にはこれら3つの側面があるという立場に立って、議論を進めていく。

2. 石居 (2008)の分析

2.1. ホドが度合いを直接選択する分析

石居 (2008)は、比較相関構文の解釈について統語的な分析を行っている。石居 (2008)は、ホドがその補部内から統語的に[+gradable]素性を持つ語を選択することによって比例の解釈が生じると考えている。

- (10) ホドは[+gradable]素性を持つ語を選択する。

[+gradable]素性を持つ語とは、何らかの意味で量や程度を表す語のことである。

[+gradable]素性を持つ語としては、たとえば、動詞が考えられる。

- (11) a. 食べれば食べるほど、太る。 [石居 2008: 249 (4)]
 b. 勉強すれば勉強するほど、よい。 [石居 2008: 249 (3)]
- (12) a. 荷物を運べば運ぶほど、腰に負担をかける。 [石居 2008: 251, (12)]
 b. 球を投げれば投げるほど、肩の筋肉は鍛えられる。
 [石居 2008: 251, (13)]

(11a)で、ホドがその補部内から動詞「食べる」を探し出して選択すると、「食べる」の程度と「太る」の程度が比例する解釈になり、(12a)では、ホドが補部内から動詞「運ぶ」を選択すると、「運ぶ」の程度と「腰に負担をかける」の程度が比例する解釈になる。「食べる」や「運ぶ」は[+gradable]素性を持つが、「荷物」のように個物を指示するものは[+gradable]素性を持たず、ホドに選択されないと石居 (2008)は考えている。

また、副詞的要素は、[+gradable]素性をもつため、ホドに選択されうる。

- (13) 客が早く来れば来るほど、忙しくなる。 [石居 2008: 250, (7)]

(13)はホドが補部内から「早く」を探し出して選択すると、「早く」の程度と「忙しくなる」の程度が比例する解釈になり、動詞「来る」が選択された場合は、「来る」の程度と「忙しくなる」の程度が比例する解釈になる。「早く」や「来る」は[+gradable]素性を持つが、「客」は[+gradable]素性を持たないので、ここでも選択の候補にならない。

さらに、形容詞も[+gradable]素性を持つ要素であり、ホドに選択される候補となりうる。

- (14) a. 大きな仕事を狙えば狙うほど、リスクは大きい。
 [石居 2008: 251, (16)]
 b. 大きな車を買えば買うほど、メンテナンスが大変だ。
 [石居 2008: 251, (17)]

(14a)で可能な解釈の1つは「大きな」の程度と「リスクは大きい」の程度が比例する解釈である²。(14b)も同様に、「大きな」の程度と「メンテナンスが大変だ」の程度が比例する解釈である。

² もちろん、動詞も選択の候補になるので、この文は、「狙う」の量/程度と「リスクは大きい」の程度が比例する解釈にもなりうる。

石居 (2008)では、(13)のように、動詞を修飾する副詞的要素がある場合にはその副詞的要素が優先的に選択されると観察している。ただし、[+gradable]素性を持つ語が一つではない他の場合に対しては、どの語が優先的に選択されるかは述べていない。文脈によって、どちらの解釈にもなりうるからである。たとえば、(14a)では(15a)と(15b)の文脈でどちらの解釈も可能である。

(15) 大きな仕事を狙えば狙うほど、リスクは大きい。 (= (14a))

[石居 2008: 251, (16)]

- a. 健は自分の進退を左右する仕事だけではなく、会社の運命を左右するような仕事を手掛けようとしている。
- b. 健は自分の進退を左右するような仕事を3回連続で選んで結果を出してきたが、さすがに10回選べば1回だけでなく2回は失敗するかもしれない。

つまり、石居 (2008)では明言されていないが、どの解釈になるかは文脈で選ばれるものだという分析だと解釈される。

2.2. 統率範囲による制限

(16)のような場合、「踊る」の程度と「舞台は華やかになる」の程度が比例する解釈が容認されるのに対して、(17)-(18)で下線部の[+gradable]素性を持つ語が比例する解釈の容認性は低いと石居 (2008)は述べている。

(16) 綺麗な人が踊れば踊るほど、舞台は華やかになる。

[石居 2008: 250, (11)]

(17) a. *綺麗な人が踊れば踊るほど、舞台は華やかになる。

[石居 2008: 250, (11)]

b. *うるさい子供が遊べば遊ぶほど公園の中は騒がしくなる。

[石居 2008: 250, (10)]

c. *賑やかな客が来れば来るほど、忙しくなる。 [石居 2008: 250, (6)]

(18) a. *健が[CP [IP 子供がよく勉強する]]と]言えば言うほど、驚く。

[石居 2008: 253, (25a)]

b. *健が[NP [CP 花子が小さく書いた]字]を読めば読むほど、疲れる。

[石居 2008: 254, (25b)]

石居 (2008)は、(17)-(18)で比例する解釈の容認性が低いのは、ホドが選択できる範囲に[+gradable]素性を持つ語がないためであると考えた。たとえば、(17)の非能格動詞のガ格名詞の修飾部や(18)の V の補部となっている CP 内の [+gradable]素性を持つ語は、ホドが選択することができないために、比例する解釈の容認性が低くなるのだと述べている。

(19) ホドが統率する要素だけが選択の候補になる。

(20) 統率

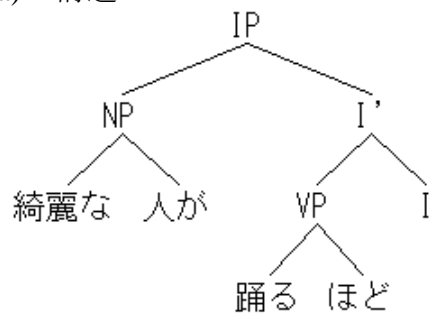
α が β を m 統御し、 α と β が同一の最大投射範疇内にあれば、 α は β を統率する。

(21) m 統御

α が β を支配せず、 α を支配する最初の最大投射が β を支配するとき、 α は β を m 統御する。

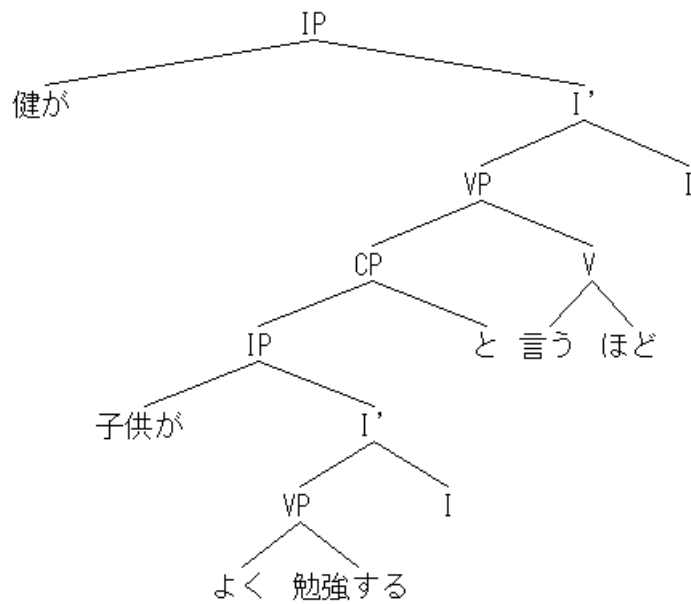
(22)で示しているように、(17a)において、V は非能格動詞であるので、ガ格名詞は VP の外にある。VP がガ格名詞を支配していないので、ホドがガ格名詞を統率することはない。その結果、比較相関の解釈ができない。

(22) (17a)の構造

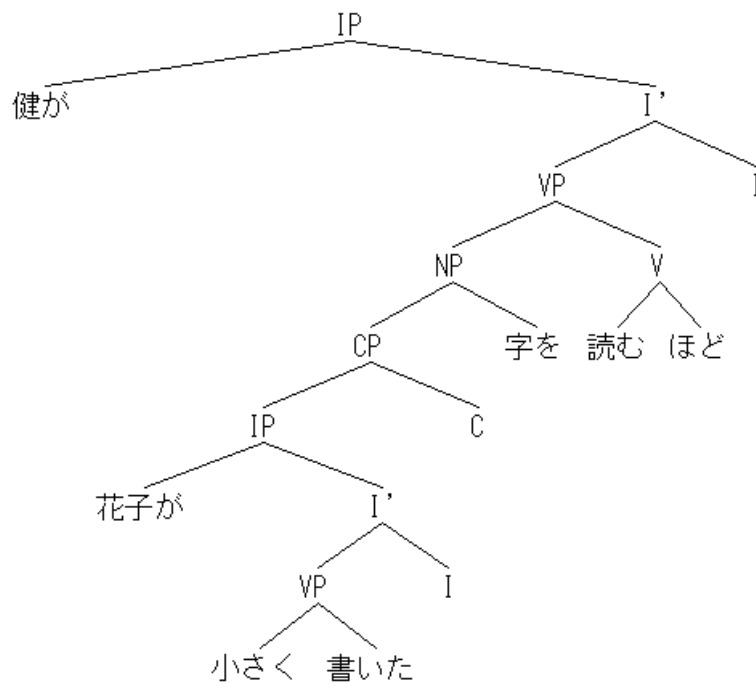


また、(18a)でも、ホドを支配する最大投射は VP であり、「よく」を支配する最大投射は CP であるので、ホドは「よく」を統率していない。そのため、比較相関の解釈ができないことになる。

(23) (18a)の構造



(24) (18b)の構造



2.3. [+gradable]素性の浸透による説明

ただし、(2)の「高い」のように、直接ホドに統率されていない要素でも選択が可能な場合がある。

- (2) [ポスターを[PP[DP[A 高い]ところ]に]貼れ]ば貼るほど、見えにくくなる。
[石居 2008: 254, (27)]

そこで、石居 (2008)は、由本 (2005)の「[+gradable]素性の浸透³」という概念を用いて(25)の仮定を加えた。

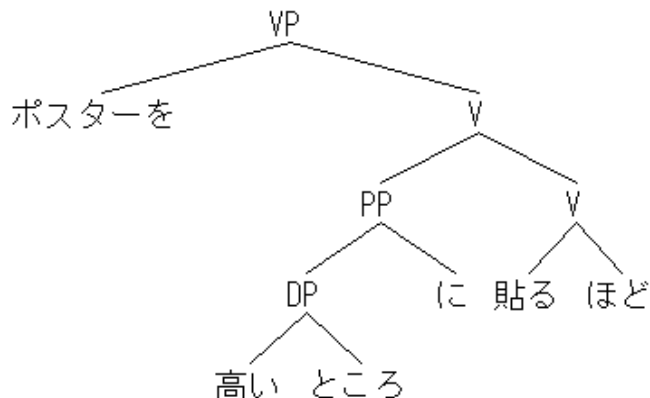
- (25) [+gradable]素性はそれを直接支配する DP とさらにその DP を直接支配する PP まで浸透する。

(25)の仮定を加えると、(2)の「高い」の[+gradable]素性は PP 「高いところに」まで浸透し、VP 内にあることになるため、V に付加しているホドによって統率されることになる。

- (26) a [ポスターを[PP[DP[A 高い]ところ]に]貼れ]ば貼るほど、見えにくくなる。
b. [獲物を[[遠く]から]狙え]ば狙うほど、はずしやすい。
c. [ブローチを[[[下の]方]に]付け]ば付けるほど、格好が悪い。
d. [電車が[[遅く]まで]走れ]ば走るほど、住民が文句を言う。

[石居 2008: 254, (27)]

- (27) (2)の構造 (= (26a))



このように石居 (2008)は、ホドが比較の対象になる表現を選択すると考え、

³ [+gradable]素性の浸透とは、由本(2005)の、Grimshaw (2000)等で提案されている拡大投射(Extended Projection)という概念に基づくものである。

その選択の範囲が構造によって制限されると考えた。要するに、この分析は、ホドが [+gradable]素性を持つ語を統語的に選択して目指す解釈を出す分析だということができる。

3. 石居 (2008)の分析の問題点

3.1. [+gradable]素性を持つ語が統率領域の外にあっても解釈可能な場合

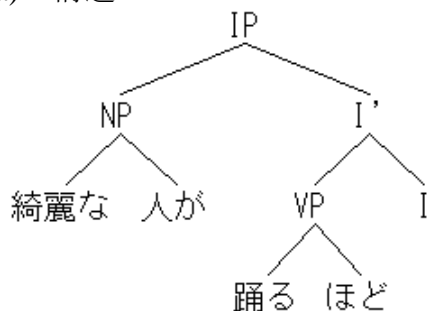
石居 (2008)の分析は、ホドがこの構文の解釈を決めるにあたってどのような役割を持っているかが明示されており、さらに、解釈のすべてを構造で決定してしまうのではなく、統語的な制約を設けるだけで、その範囲から文脈に合うものが選択されると想定している点で説得的である。しかし、石居 (2008)の分析には、反例となる事実が多数存在する。

たとえば、(17a)は、石居(2008)では容認されない例とされていたが、あらためて(28)の文脈を設定して考えてみると、「踊れば踊るほど舞台は華やかになる」という解釈も可能であると同時に、「綺麗であれば綺麗であるほど舞台華やかになる」という解釈も許される。

- (28) (ステージで人が踊る店で、多くの人が踊っている。その中でも、見た目には差があって…)
OK[[綺麗な人]が踊る]ほど、舞台は華やかになる。
解釈: 踊る人の綺麗さの度合いと舞台が華やかになる度合いが比例する。

(17a)の構造図を以下に挙げる。

(22) (17a)の構造



石居(2008)の分析によると、(17a) (上の(22)) では、「綺麗な」を含むNPは、「踊る」が非能格自動詞であるため、VPの外に基底生成される。そのため、

ホドによって統率されることはない。仮に、NP が統率されるような仮定に基づいたとしても、「綺麗な人が」が [PP [NP 綺麗な人] が] のような構造になっており、(25)が適用されたとしても、[+gradable]素性はPP までしか浸透しないので、やはりホドに統率されることはない。つまり、石居 (2008)の分析では、どのように考えたとしても、ホドは「綺麗な」を統率できないので、「綺麗な」が比較の対象には選ばれないはずである。しかし、上で見たように、「綺麗な」と「華やかになる」が比例する解釈が観察される。

同様に、石居 (2008)では、非能格自動詞の主語名詞句の修飾部が比例する解釈ができない例として解釈が挙げられていた例も、(29)や(30)の文脈で考えると、十分に容認される。

(29) (ある公園には、砂場でおとなしく遊ぶ子からグラウンドで元気にはしゃぎながら遊ぶ子がよく来る。その中でも、一番はしゃぐ子が遊んでいて…)

^{OK}[[うるさい子供]が遊ぶ]ほど、公園の中は騒がしくなる。

[石居 2008: 250, (10)]

(30) (大酒のみがよく集まるその酒場では、多少にぎやかな客よりも、派手に騒ぐにぎやかな客の方が、よく話すし、よく飲むし、よく食べる…)

^{OK}[[賑やかな客]が来る]ほど、忙しくなる。 [石居 2008: 250, (6)]

どちらの例でも、比較の対象となっている修飾部を含むNPは、VPの外にあり、ホドによって統率されないので、比較の対象としては選択されないはずである。しかし、そのような語が比較の対象となる解釈が可能なのである。

石居 (2008)では、他動詞など、非対格自動詞ではない要素が述語である場合には、非能格自動詞と同様に、主語名詞が VP の外に基底生成されると考えられている。そうであるならば、他動詞文などでも、主語名詞を比例の対象とした解釈は許されないはずである。しかし、以下の例で示すように、そのような例でも主語の修飾部を比例の対象とした解釈が比較的取りやすい。

(31) ^{OK}[[腕のいい]美容師が髪を切る]ほど、きれいに見える。

石居 (2008)は、比例の解釈が、[+gradable]素性を持つ語が選択されたからこそ生まれる解釈であると主張している。(31)の例で言うと、下線部の語が選択されなければ、「腕の良さ」と「きれいに見える」が比例する解釈は生まれない。

つまり、石居 (2008)の分析は「腕の良さ」は選択されないということを予測してしまう。

石居(2008)において(17a)が容認されないと判断された理由のひとつに、「V スレバ V スルホド」という形式が用いられていたことがあるのではないだろうか。石居 (2008)では「V スレバ V スルホド」という形式が用いられているが、「V スルホド」という形式でも、ほとんど解釈は変わらない。

(32) a. 健は変化球を投げれば投げるほど疲れる。

b. 健は変化球を投げるほど疲れる。

解釈：健が変化球を投げる度合いと疲れる度合いが比例する。

「V スレバ V スルホド」という形式が用いられると、比例するのが動詞の表す event の量であるという解釈が強くなり、それ以外の解釈が難しくなる。つまり、石居 (2008)は、(15)のような多義性にも言及していながら、動詞が選択されやすい文ばかりを扱っていたことになる。

(15) 大きな仕事を狙えば狙うほど、リスクは大きい。 (= (14a))

[石居 2008: 251, (16)]

a. 健は自分の進退を左右する仕事だけではなく、会社の運命を左右するような仕事を手掛けようとしている。

b. 健は自分の進退を左右するような仕事を 3 回連続で選んで結果を出してきたが、さすがに 10 回選べば 1 回だけでなく 2 回は失敗するかもしれない。

そこで、以下では、もっぱら「V スルホド」という形式を用いることにする。同様に樹形図においても本論の議論では「V スレバ V スルホド」という形式は「V スルホド」と変わらない。そのため、2 章でも、ホドと[+gradable]素性を持つ語との関係を単純化する目的で「V スルホド」という形式を用いている。

(33)は比例する解釈になる語が目的語名詞に含まれている例である。

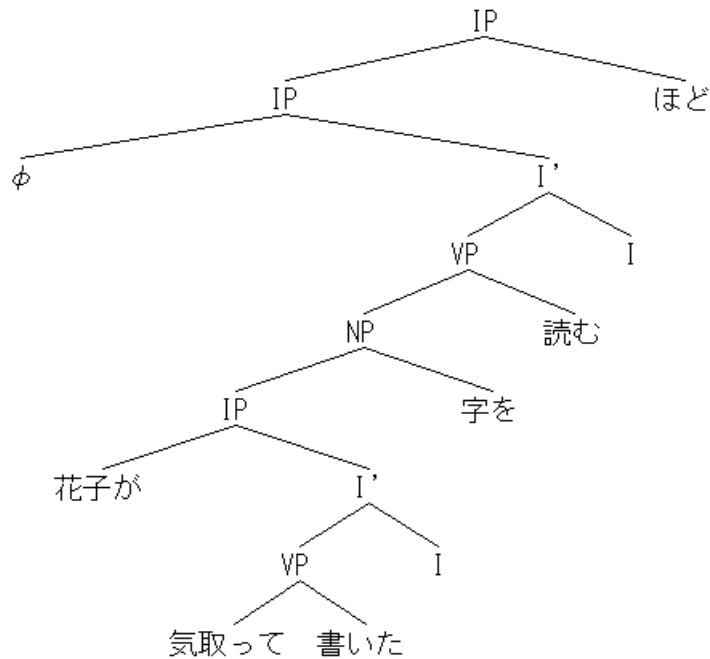
(33) a. ^{OK} 健は[[[花子が小さく書いた]字]を読む]ほど、うんざりする。

b. ^{OK} 健は[[[[[花子が小さく書いた]字]を読む]こと]を考える]ほど、うんざりする。

これらの例では、「小さい」という表現が深く埋め込まれているにもかかわらず

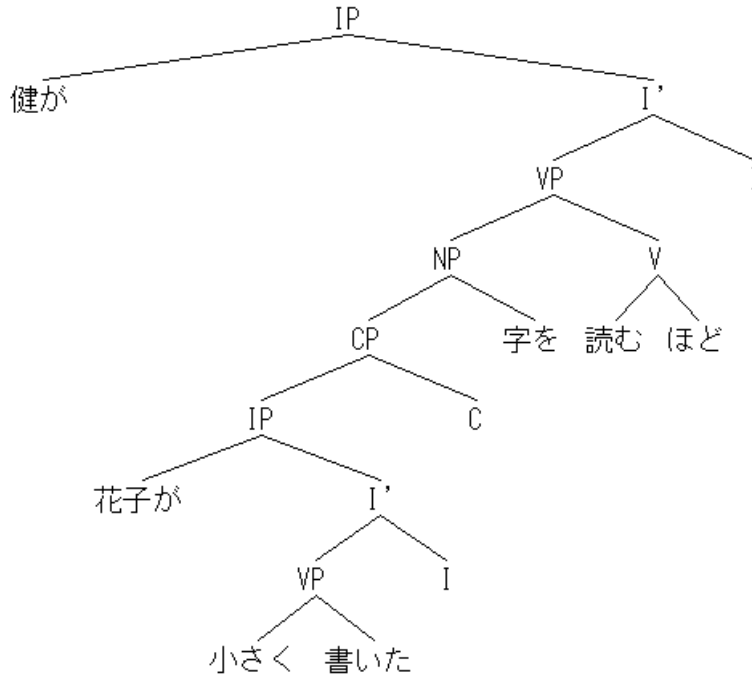
ず、字が小さい度合いとうんざりする度合いが比例する解釈が可能である。
 (33a)の構造を(34)に示しておく。

(34) (33a)の構造



石居 (2008)の分析では、「小さく」は V の補部となっている CP 内にあるので、
 ホドに統率されず、比較相関の解釈ができないことになる。石居 (2008)の構造
 を次の(24)に再掲する。

(24) (18b)の構造 (再掲)



しかし、(33a)のように、実際には「小さく」と「うんざりする」が比例する解釈が可能である。(33b)のように、「小さく」がさらに深く埋め込まれている場合でも、同様の解釈が観察される。(35)-(37)に示されているように、比例する概念を表す語が非常に深く埋め込まれていても、比例の解釈が可能な場合がある。

- (35) a. ^{OK}[娘が遠い大学に通う]ほど、心配になる。
 b. ^{OK}[[娘が遠い大学に通う]ことを考える]ほど、心配になる。
- (36) a. ^{OK}[子供たちが楽しく遊ぶ]ほど、幸せになる。
 b. ^{OK}[[子供たちが楽しく遊ぶ]のを見る]ほど、幸せになる。
- (37) a. ^{OK}[舞台できれいな人が踊っている]ほど、楽しくなる。
 b. ^{OK}[[舞台できれいな人が踊っている]のを見る]ほど、楽しくなる。

例えば、(35)では、どちらの例でも娘が通う学校が遠い度合いと、心配になる度合いが比例する解釈が可能である。上の(28)の場合には、統語構造の仮定次第によっては、「人」がホドによって統率されているという可能性もあり得るかもしれないが、(33)では、「小さく」は複合名詞句の中に含まれており、どのように統語構造を仮定したとしても、ホドによって統率されているとは考えられない。それにもかかわらず、(33)でも、ここで問題にしている解釈は可能

なのである。このように、(28)-(37)の観察は、[+gradable]素性を持つ語が、石居 (2008)の分析で言うところの統率領域の中になくても、比較相関の解釈が可能であるということを示している。

3.2. [+gradable]素性を持つ語だけを選択できない場合

さらに、[+gradable]素性を持つ語をホドが選択するという分析では、(38)のような例の解釈がうまく説明できない。

- (38) a. 健は[[[花子が大きく書かなかった]字]を読む]ほど、うんざりする。
b. 花子は[[[きれいに映らなかった]写真]を見る]ほど、慄然となる。

たとえば、(38a)において可能な解釈は、花子が書いた字の大きくなさ (=小ささ) の度合いとうんざりする度合いとを比例する解釈である。石居 (2008)の分析でこのような解釈を出すためには、「大きくない」がホドによって選択されなければならないところであるが、(38a)で明らかのように、この文は「大きくない」という語を含んでいるわけではない。選択できる [+gradable]素性を持つ語としては「大きい」しかないので、石居 (2008)の分析からは、字の大きさとうんざりする度合いが比例する、つまり、「字が大きくなるほど、うんざりする」という不適切な解釈しか予測されない。(38b)も同様の例である。

3.1 節では、石居 (2008)の分析の反例として、統率領域に含まれない語も比例する要素として選択されうるということを指摘したが、本節で示したように、そもそも、ホドが統語的に[+gradable]素性を持つ語を選択する、というアプローチに無理があるのである。

4. 提案

4.1. ホドはどのような語を選択するべきなのか

3章で示したように、[+gradable]素性を持つ語をホドが選択するという分析は不適切である。本論文では、そのかわりに、ホドが、何らかのスケールで度合いを測られる「対象」を選択するというアプローチを提案したい。

まず、ホドが関わる比較相関構文の意味解釈を詳しく観察しておく。(39)を見てほしい。

- (39) a. [P 綺麗なダンサーが踊る]ほど、[Q 舞台が華やかになる]。
b. [P 花子が派手な帽子をかぶる]ほど、[Q 目立つ]。

ここで注目する(39a)の解釈は、ダンサーの綺麗さの度合いと舞台が華やかになる度合いが比例する解釈である。まず、この構文は、ダンサーが綺麗であることと、舞台が華やかであることとの間に因果関係を認めている構文である⁴。つまり、この構文全体で表しているのは、「ダンサーの綺麗さ」を Cause、「舞台が華やかになる」を Result とする因果関係がある、という言明である。同様に、(39b)については、「帽子の派手さ」を Cause、「目立つ」を Result とする因果関係である。つまり、ホドは(40)のような項構造を持つ述語である。

- (40) a. ホド (Cause=ダンサーの綺麗さ, Result=舞台が華やかになる)
b. ホド (Cause=帽子の派手さ, Result=目立つ)

(41) ホドは Cause と Result の項を取る述語である。

ここで注目したいのは、Cause となる要素を決めるためには、どのような対象のどのような側面が問題になっているか、という2つの情報が必要だということである。石居 (2008)の分析は、いわば、この2つのうちの後者をホドが統語的に選択するというものであったが、本論文で提案するのは、ホドが、前者の「どのような対象が問題になっているのか」を統語的に選択するという分析である。以下では、この対象のことを「度合いを測られる対象」と呼ぶことにする。

(39)では「度合いを測られる対象」は「ダンサー」もしくは「帽子」という個物 (individual) であるが、次の例では event が「度合いを測られる対象」として選択されていると考えればよい。

(42) [P 太郎が怒鳴る]ほど、[Q 花子が萎縮する]。

ホド (Cause=怒鳴るの量/頻度, Result=花子が萎縮する)

ホドが「怒鳴る」という event を因果関係の Cause として選択した結果、文全体の解釈は、「太郎が怒鳴る量/頻度と花子が萎縮する度合いが比例する」となる。

つまり、ホドは統語的には(43)のように Merge するが、P の中から Cause となる「度合いを測られる対象」を選択し、Q をその Result として選択すること

⁴ ホドの解釈に因果関係が関わるという点は、1.2 節で示したように奥津 (1980)の指摘のとおりである。

によって比較相関の解釈を生み出している。

(43)

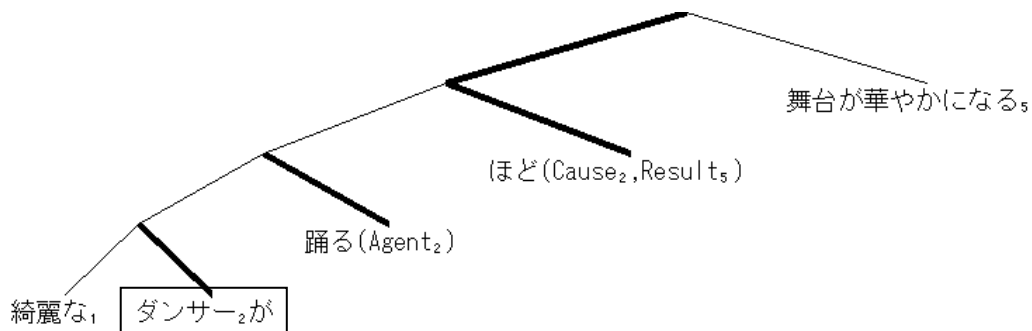


いくつか例を示しておく。以降では、どの要素がどれを項として取っているかわかるように、とった項の指標を意味役割に振ることにする。たとえば、(39)で、ホドが「ダンサー」を「度合いを測られる対象」として選択したとする。

(44) [P 綺麗な₁ ダンサー₂が踊る₃]ほど₄, [Q 舞台が華やかになる₅]。

ホドは Cause という役割の項として「ダンサー」を、Result という役割の項として「舞台が華やかになる」をとり、「ダンサー」を綺麗さのスケールで測ることで、比例の解釈を出している。

(45) (44) の構造

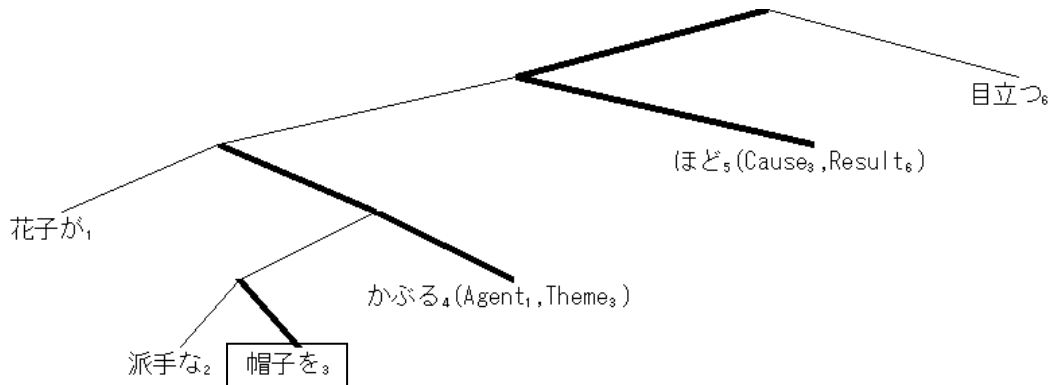


また、(46)で、ホドが「帽子」を「度合いを測られる対象」として選択したとする。

(46) [P 花子₁が派手な₂ 帽子₃をかぶる₄]ほど₅, [Q 目立つ₆]。

ホドは Cause の役割の項として「帽子」を、Result の役割の項として「目立つ」をとり、「帽子」を「派手な」のスケールで測ることで比例の解釈をだしている。

(47) (46)の構造



4.2. 対象を測るスケールを設定

ホドは「度合いを測られる対象」を選択する。しかし、対象を選択するだけでは解釈は成立しない。どのような観点で、つまり何のスケールの上での度合いを読み取るのかということが設定される必要がある。そのスケールはどのように設定されるのであろうか。

対象さえ定めれば、どのような解釈でも成り立つわけではない。

- (48) a. きれいなダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。
b. 有名なダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。
c. ダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。

たとえば(48a)では、「ダンサーが綺麗なほど」という意味になり、(48b)では、「ダンサーが有名なほど」という意味になる。これに対して、(48c)のように「度合いを測られる対象」を修飾する要素が生起していない場合、「ダンサー」を何らかのスケールで測ることができない⁵。たとえば、(49)のように文脈的に優位なスケールを設定しておいた場合ですら、比較相関構文中に「きれいな」が生起しない限り、「ダンサー」を「きれいさ」のスケールで測ることはできないのである。

- (49) ダンサーは、数じゃない。なんと言っても見た目がきれいかどうかだけが重要なんだ。ダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。

⁵ 「ダンサー」の多さを問題にしている解釈は成り立つ可能性があるが、その場合には、「踊る」が選択されていると考えている。

つまり、個物が「度合いを測られる対象」として選択された場合、原則的には、その修飾要素によって、スケールが設定される⁶。比較相関構文中に、その個物を修飾する表現が生起していない場合、スケールが設定されず、解釈が成り立たなくなる。

動詞が選択された場合も同様で、共起する副詞によってスケールが設定される。(50a)は踊るきれいさの度合いと舞台が華やかになる度合いが比例する解釈になり、(50b)は踊り方の度合いが比例する解釈になる。

- (50) a. ダンサーがきれいに踊るほど、舞台が華やかになる。
b. ダンサーが激しく踊るほど、舞台が華やかになる。

ただし、名詞が選択された場合と異なり、動詞の場合には、修飾要素が何もあらわれていない場合でも解釈が可能である。

- (51) a. ダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。
b. 走るほど、疲れる。
c. 貯金が増えるほど、うれしい。

たとえば、(51a)は踊る量／頻度と舞台が華やかになる度合いが比例する解釈になる。動詞が「度合いを測られる対象」に選択された場合は、その event の量／頻度というスケールで測る解釈が常に可能なのである。

設定されるスケールは、必ずしも対象を直接修飾しているとは限らない。たとえば、(52a,b)はどちらも一見、容認性が高くないかもしれないが、いろいろな状況を想像すると、(52a)は容認可能になってくる。

- (52) a. 健は[[[花子が気取って書いた] 字]を読む]ほど、うんざりする。
b. 健は[[[花子が着飾って書いた] 字]を読む]ほど、うんざりする。

つまり、花子が気取って書いた字は気取った字になるという状況を考えれば、(52a)は容認可能である。それに対して(52b)の場合、花子が着飾って書いた字は着飾った字になるという状況はきわめて考えにくいいため、どうしても容認可能性が上がらないのであろう。ということは、対象を測るスケールだと考えられ

⁶ この原則から逸脱している場合については、(52)以降で論じる。

るかどうかで(52)の容認性の差が出ているということである。つまり、名詞の「字」は対象としてホドによって統語的に選択されるのに対して、「字」の度合いを測るスケールは、対象を測れると考えられるものを文脈から選んでいるだけなのである。

まとめると、「度合いを測られる対象」を測るスケールは(53)と(54)のように設定される。

- (53) ホドが「度合いを測られる対象」として個物を選択した場合、スケールは言語表現としてあらわれているものに限られる。
- (54) ホドが「度合いを測られる対象」として event を選択した場合も、その event に関わると理解される修飾要素がある場合には、それがスケールとなるが、何も言語表現がない場合には、量もしくは頻度のスケールが設定される。

対象が選択されてもスケールを設定することができなければ、解釈不可能になる。つまり、ホドが個物を選択した場合には、スケールに相当する言語表現がなければ解釈不可能になるのに対して (cf. (48a), (48b), (48c))、ホドが event を選択した場合には、常に解釈が成り立つことになる。

4.3. 「度合いを測られる対象」の構造条件

以上述べてきたように、ホドは「度合いを測られる対象」を選択し、(多くの場合、生起している言語表現に基づいて) スケールを設定して、比例解釈を生み出す。ところが、スケールを設定するための言語表現があっても、比例相関解釈が容認できない場合がある。たとえば、(55)を見てほしい。

- (55) a. *[[[花子が小さく書いた]字]を読む]勉強会を開く]ほど、参加人数が減る。
- b. ^{OK}健は[[[花子が小さく書いた]字]を読む]ほど、うんざりする。

(55b)では「花子が小さく書いた」というスケールを設定して「字」を測ることができる。一方で、(55a)では、「字」を測るスケールを設定しうる「花子が小さく書いた」があるので、「字」の書かれた小ささの度合いと参加人数が減る度合いが比例するという解釈ができてもいいところであるが、実際には、その解釈は不可能である。

したがって、選択される「度合いを測られる対象」には構造的な条件がある
と考えるべきである。「度合いを測られる対象」として選択可能な場合と、不
可能な場合を比べてみると、後者の場合、当該の要素が連体修飾節の中に含ま
れているということがわかる。

(56) 「度合いを測られる対象」になりうる場合：

- a. 綺麗なダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。
- b. 有名な女優が本を売るほど、売上が上がる。
- c. [健]が[[花子が小さく書いた]字]を読むほど、うんざりする。
- d. [健]が[[[花子が小さく書いた]字]を読むこと]を[考える]ほど、うんざりする。
- e. [[[花子が小さく書いた]字]を読む勉強会]を開くほど、参加人数が減る。

(57) 「度合いを測られる対象」にならない場合：

- a. *[健]が[[花子が小さく書いた]字]を読むほど、うんざりする。
- b. *[健]が[[うるさい花子が小さく書いた]字]を読むほど、うんざりする。
- c. *[[[花子が小さく書いた]字]を読む勉強会]を開くほど、参加人数が減る。
- d. *[[[にぎやかな友達]が喜ぶ]パーティー]を開く計画を立てるほど、楽しい。
- e. *[生徒]が[[先生]が上手に作った]問題を[解く]技術を見るほど、点数が上がる。

それに対して、連体修飾節の中でなければ、(56d)のように、かなり深く埋め込まれていても対象として選択される⁷。言い換えれば、ホドから見て、「項」も

⁷ (56d)のように「こと」のような補文を導く形式名詞であれば、さらに深く埋め込まれた「対象」について解釈することが可能である。これは、「こと」が補文内容を項としてとるためであると考えたい。そのため、ホドは「こと」よりさらに深く埋め込まれた「対象」まで、項の関係を持つことができるのである。ただし、「こと」を「苦勞」に変えると、「苦勞」が「対象」になる解釈は可能だが、「苦勞」の連体修飾節の中にある「対象」についての解釈ができなくなる。これはやはり、「項の項」の関係が途切れたためである。

(i) [健]が[[[花子が小さく書いた]字]を読む]苦勞を[考える]ほど、うんざりする。

しくは「項の項」という関係を持つものならば、「度合いを測られる対象」の候補となり、その「項の項」という関係が途切れると「度合いを測られる対象」になることはできないのである。そこで、この「項の項」という関係を構造的に捉えるために、ARGUMENT という概念を定義しておく⁸。

(58) ARGUMENT

- a. 項(argument)をとる述語 P の項(argument)は、P の ARGUMENT である。
- b. X が Y の ARGUMENT であり、Y が Z の ARGUMENT であるならば、X は Z の ARGUMENT である。

以下、(56),(57)の例文の構造を示し、ホドが ARGUMENT の中から Cause を選択するという分析でうまく説明できるということを示していく。

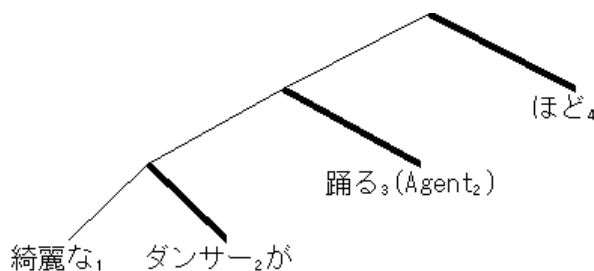
たとえば、(56a)をしてみると、「踊る」はホドの項であり、「ダンサー」はホドの項の「踊る」の項なので、「踊る」と「ダンサー」は ARGUMENT である。

(56) a. 綺麗なダンサーが踊るほど、舞台が華やかになる。

「踊る」の量／頻度が問題になる解釈の場合は、「踊る」が Cause として選択され、「ダンサー」の綺麗さが問題になる解釈の場合は、「ダンサー」が Cause として選択されている。

(59) (56a)の構造

綺麗な₁ ダンサー₂が踊る₃ほど₄、舞台₅が華やかになる₆



(56b)は、「売る」はホドの項であり、「女優」と「本」はホドの項の「売る」

⁸ 「項」の位置づけについては、4.6 節でもさらに考察を加える。

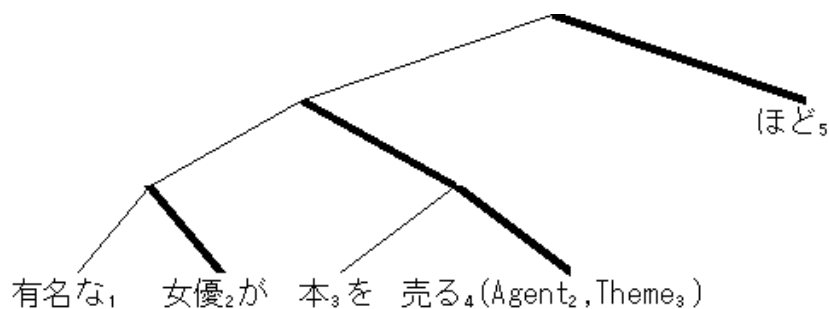
の項なので、「売る」と「女優」と「本」は ARGUMENT である。

(56) b. 有名な女優が本を売るほど、売上が上がる。

「売る」の量／頻度が問題になる解釈の場合は、「売る」が Cause として選択されており、「女優」の有名さが問題になる解釈の場合は、「女優」が Cause として選択されている。「本」もホドの ARGUMENT であるから選択されることはありうるが、その場合、(53)により、スケールが設定できず、解釈不能となる。(60)は(56b)の構造である。

(60) (56b)の構造

有名な₁ 女優₂が 本₃を 売る₄ほど₅、売上₆が上がる₇



(56d)は(56c)をさらに埋め込んだものである。(56c)では、「読む」はホドの項であり、「字」と「健」は、その「読む」の項なので、「読む」と「字」と「健」は ARGUMENT である。また、(56d)では、「考える」はホドの項であり、「読むこと」はその「考える」の項なので ARGUMENT である。さらに、「字」と「健」は、「読むこと」の項なので、これもホドの ARGUMENT である。

(56) c. OK 健が[[花子が小さく書いた]字]を読むほど、うんざりする。

d. OK 健が[[[花子が小さく書いた]字]を読むこと]を考えるほど、うんざりする。

(56c)では、字の小ささの度合いとうんざりする度合いが比例する解釈の場合、「字」が Cause として選択されている。この解釈は、(56d)のように、さらに埋め込まれても可能である。また、(56d)では、「読むこと」の量／頻度が問題になる解釈があるが、その場合、「読むこと」が Cause として選択されている。もちろん、「考える」も Cause として選択されうる。

これに対して、(57)の「度合いを測られる対象」にならない場合を見てみる。たとえば、(57a)では、ホドの ARGUMENT は「読む」と「字」と「健」である。「花子」は「書いた」の項であるが、その「書いた」は「読む」の項ではないので、「項の項」関係が途切れており、「花子」も「書いた」もホドの ARGUMENT ではない。

(57) a. *[健が[[花子]が小さく書いた]字]を読む]ほど、うんざりする。

だからこそ、「書けば書くほど、うんざりする」という解釈が容認不可能なのである。(57a)の「花子」の場合、スケールを設定することもできないが、(57b)のように、「花子」を測るスケールを設定するために修飾表現を補っても、「うるさければうるさいほど、うんざりする」という解釈はえられない。それも、「花子」がホドの ARGUMENT ではないからである。

(57) b. *[健が[[うるさい花子]が小さく書いた]字]を読む]ほど、うんざりする。

また、(57c)では、「開く」と「勉強会」がホドの ARGUMENT だが、「読む」で「項の項」関係が途切れており、「字」、「読む」、「書いた」、「花子」はホドの ARGUMENT ではない。

(57) c. *[[[[花子]が小さく書いた]字]を読む]勉強会を開く]ほど、参加人数が減る。

(57) e. [[[花子が小さく書いた]字を読む]勉強会を開く]ほど、参加人数が減る。

そのため、「字が小さいほど参加人数が減る」という解釈が不可能なのである。同様に、「読む」、「書いた」、「花子」を Cause として選択する解釈はない。(57e)と比べてほしい。「開く」と「勉強会」はホドの ARGUMENT なので Cause として選択する解釈が可能である。(57d,e)も、同様に、「項の項」関係が途切れると、選択することができなくなる。(57d)のホドの ARGUMENT は「立てる」と「計画」であるが、「友達」、「喜ぶ」、「パーティー」「開く」はホドの ARGUMENT ではない。また、(57e)では、「先生」、「作った」、「問題」、「解く」はホドの ARGUMENT ではない。

- (57) d. *[[[にぎやかな**友達**が**喜ぶ**]**パーティー**を**開く**]]計画を立てる]ほど、楽しい。
- e. *[生徒が[[**先生**が上手に**作った**]**問題**を**解く**]]技術を見る]ほど、点数が上がる。

(57d)では、「友達」、「喜ぶ」、「パーティー」、「開く」を Cause として選択する解釈はなく、(57e)では、「先生」、「作った」、「問題」、「解く」を Cause として選択する解釈はないのである。このように、ARGUMENT でないものは、Cause として選択されない。

(58)の ARGUMENT という概念を仮定することで、Cause として選択される「度合いを測られる対象」の分布を説明することができるのである。

4.4. 提案する分析

ここまでの提案をまとめておく。基本的には石居 (2008)と同じく、ホドがこの構文の解釈を決める鍵をにぎっており、解釈のすべてを決定してしまうのではなく、ある範囲を定めるだけで、その中から文脈に合うものが選択されると考えている。しかし、本論文では、石居 (2008)とは異なり、(61)を主張する。

- (61) ホドは、Cause の役割を果たすものとして、その ARGUMENT の中から一つ「度合いを測られる対象」を選択する。

(58) ARGUMENT

- a. 項(argument)をとる述語 P の項(argument)は、P の ARGUMENT である。
- b. X が Y の ARGUMENT であり、Y が Z の ARGUMENT であるならば、X は Z の ARGUMENT である。

ホドは「度合いを測られる対象」を選択する。しかし、4.2 節で指摘したように、対象を選択するだけでは解釈は成立しない。何のスケールの上での度合いを読み取るのかということが設定される必要がある。スケールの設定は基本的には文脈に依存するものの、(53)と(54)の条件がある。

- (53) ホドが「度合いを測られる対象」として個物を選択した場合、スケールは言語表現としてあらわれているものに限られる。

- (54) ホドが「度合いを測られる対象」として event を選択した場合も、

その event に関わると理解される修飾要素がある場合には、それがスケールとなるが、何も言語表現がない場合には、量もしくは頻度のスケールが設定される。

次の節で、ここまで言及したいろいろな例文が、この提案によってどのように説明できるか、あらためて詳しく示す。

4.5. 提案する分析による説明

4.5.1. P ホド Q の P が埋め込み文を含まない場合

たとえば(62)では、ホドの ARGUMENT は {遊ぶ, 子供} である。

(62) 子供が遊ぶほど、公園の中は騒がしくなる。

ホドが「遊ぶ」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「遊ぶ」が量のスケールで測られ、その量と公園の中は騒がしくなる度合いが比例する解釈になる。「子供」も ARGUMENT なので選択されうるが、「子供」を測るスケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、(63)のようにスケールの設定ができるような表現があれば、解釈可能になる。

(63) うるさい子供が遊ぶほど、公園の中が騒がしくなる。

(64)の ARGUMENT は {来る, 客} である。

- (64) a. 客が来るほど、忙しくなる。
b. 客が早く来るほど、忙しくなる。

(64a)でホドが「来る」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「来る」の頻度のスケールで測られて、来る度合いと忙しくなる度合いが比例する解釈になる。「客」も ARGUMENT なので選択されうるが、「客」を測るスケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、スケールの設定ができれば、解釈可能になる。(64b)で、ホドが「来る」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「早く」のスケールで測り、来る早さの度合いと忙しくなる度合いが比例する解釈になる。

(28)のホドの ARGUMENT は {踊る, 人} である。

(28) (ステージで人が踊る店で、多くの人が踊っている。その中でも、見た目には差があって…)

[[綺麗な 人]が 踊る]ほど、舞台は華やかになる。

ホドが「踊る」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「踊る」の頻度のスケールで測られて、踊る度合いと舞台が華やかになる度合いが比例する解釈になる。ホドが「人」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「綺麗な」のスケールで測り、踊る人の綺麗さの度合いと舞台が華やかになる度合いが比例する解釈になる。

(65)の ARGUMENT は {売る, 人, 本} である。

(65) 有名な 人 が 本 を 売る ほど、売上があがる。

ホドが「売る」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「売る」の頻度のスケールで測られて、売る度合いと売上があがる度合いが比例する解釈になる。ホドが「人」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「有名な」のスケールで測り、売る人の有名さの度合いと売上があがる度合いが比例する解釈になる。「本」は ARGUMENT なので選択されうるが、「本」を測るスケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、これまでの例文と同様、何らかの修飾表現がありスケールの設定ができれば、解釈可能になる。

4.5.2. P ホド Q の P が埋め込み文を含む場合

(33a)の ARGUMENT は {読む, 字, 健} である。また、(33b)の ARGUMENT は {考える, 読むこと, 字, 健} である。

- (33) a. ^{OK} [健] が [[花子が小さく書いた] 字] を [読む] ほど、うんざりする。
b. ^{OK} [健] が [[[花子が小さく書いた] 字] を [読むこと] を] [考える] ほど、うんざりする。

(33a)で、ホドが「読む」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「読む」の頻度のスケールで測られて、読む度合いとうんざりする度合いが比例する解釈になる。ホドが「字」を「度合いを測られる対象」として選択すると、小ささのスケールで測り、字の小ささの度合いとうんざりする度合いが比例する解釈になる。「健」も ARGUMENT なので選択されうるが、「健」を測るス

ケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、スケールの設定ができれば、解釈可能になる⁹。(33b)では、ホドが「考える」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「考える」の頻度のスケールで測られて、考える度合いとうんざりする度合いが比例する解釈になる。ホドが「読むこと」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「読むこと」の頻度のスケールで測られて、読む頻度の度合いとうんざりする度合いが比例する解釈になる。ホドが「字」を「度合いを測られる対象」として選択すると、小ささのスケールで測り、字の小ささの度合いとうんざりする度合いが比例する解釈になる。

「健」も ARGUMENT なので選択されうるが、「健」を測るスケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、スケールの設定ができれば、解釈可能になる。

(56e)、(57c)の ARGUMENT は {開く, 勉強会} である。

(56e) ^{OK}[[[花子が小さく書いた]字を読む]勉強会を[開く]]ほど、参加人数が減る。

(57c) *[[[花子が小さく書いた]字]を読む]勉強会を開く]ほど、参加人数が減る。

ホドは ARGUMENT である「開く」と「勉強会」を「度合いを測られる対象」し、設定可能なスケールで測ることは可能である。しかし、「読む」はホドの項の「開く」の項ではないので、「字」はホドの ARGUMENT ではない。

4.2 節で、(52a,b)の容認性の差が統語的な問題ではないことを指摘した。本論の提案に沿って説明すると、次のようになる。(52a,b)のホドの ARGUMENT は {読む, 字, 健} である。ここで、「書いた」は、「字」の項ではないので、ホドの ARGUMENT ではなく、したがって、「花子」も「字」の ARGUMENT ではないのでホドの ARGUMENT ではない。

(52) a. [健 は[[花子が気取って書いた] 字]を 読む]ほど、疲れる。

b. [健 は[[花子が着飾って書いた] 字]を 読む]ほど、疲れる。

(52a)で、ホドが「字」を「度合いを測られる対象」として選択すると、気取り

⁹ たとえば、(33a)で「くたくたの健が」のように、「健」を測るができるスケールが設定できれば、健のくたくた度合いとうんざりする度合いが比例する解釈が可能である。

(i) ^{OK}[くたくたの健が[[花子が小さく書いた]字]を読む]ほど、うんざりする。

具合を「字」を測るスケールとして設定できたら、字が気取っている度合いと健が疲れる度合いが比例する解釈になる。一方、(52b)では、同様にホドが「字」を選択することはできるが、「花子が着飾って書いた」が字を測るスケールであると設定できなければ、「着飾って」という度合いで ARGUMENT の「字」を測ることはできなくなる。ただし、「健」も ARGUMENT なので選択されるが、適切な度合いが見つからず、解釈不可能である。

4.5.3. 石居 (2008)の問題点と提案した分析

3章で、石居 (2008)のスケールを直接選択する分析では、[+gradable]素性を持つ語が統率領域の外でも比例関係を作る現象があるという問題点と、[+gradable]素性を持つ語だけを選択するとは考えられない現象があるという問題点を指摘した。しかし、本論のホドが「度合いを測られる対象」を選択するという提案に沿って考えると、この問題となった現象も説明できる。

すでに示したように、(28)のホドの ARGUMENT は {踊る, 人} であり、ホドが「人」を「度合いを測られる対象」として選択し、「綺麗な」のスケールを設定することにより、踊る人の綺麗さの度合いと舞台が華やかになる度合いが比例する解釈になる。

- (28) (ステージで人が踊る店で、多くの人が踊っている。その中でも、見た目には差があって…)
[[綺麗な 人]が 踊る]ほど、舞台は華やかになる。

また、(33)も同様に、「小さく」が埋め込まれているために、[+gradable]素性を持つ語を直接選択する分析では問題になる現象であった。しかし、4.5.2 節で示したように、(33a)の ARGUMENT は {読む, 字, 健} であり、ホドが「字」を選択し、小ささのスケールを設定することにより、字の小ささとうんざりする度合いが比例する解釈になる。

- (33) a. ^{OK} [健]は[[花子が小さく書いた]字]を [読む]ほど、うんざりする。
b. ^{OK} [健]は[[花子が小さく書いた]字]を [読むこと]を [考える]ほど、うんざりする。

さらに、石居 (2008)の分析では、[+gradable]素性を持つ語だけを選択するとは考えられない現象も問題となった。これも、本論の提案であれば説明できる。

(38a)のホドの ARGUMENT は {読む, 字, 健} である。

- (38) [健] は[[花子が大きく書かなかった] 字]を [読む]]ほど、うんざりする。
- a. 解釈: *字が大きく度合いと、健がうんざりする度合いが比例する。
 - b. 解釈: ^{OK}字が大きく書かれなかった度合いと、健がうんざりする度合いが比例する。

ホドが「読む」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「読む」の頻度のスケールで測られて、読む度合いと疲れる度合いが比例する解釈になる。ホドが「字」を「度合いを測られる対象」として選択すると、書いた字の小さくさ (=小ささ) のスケールで測り、字の小ささの度合いと疲れる度合いが比例する解釈になる。「健」も ARGUMENT なので選択されうるが、「健」を測るスケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、これまでの例文と同様、何らかの修飾表現がありスケールの設定ができれば、解釈可能になる。

以上示したように、ホドが ARGUMENT の中から「度合いを測られる対象」を選択し、測るスケールを設定することで、比較相関構文の特性を説明できるのである。

4.6. 語彙的項と統語的項

4.3 節で述べたように、本論文では、ホドの意味解釈に ARGUMENT という概念が関与していると主張している。ここで、次の例文が問題になると思うかもしれない。

- (66) ダンサーが綺麗な[衣装]で踊るほど、舞台が華やぐ。

(66)は、衣装の綺麗さの度合いと舞台が華やぐ度合いが比例する解釈が可能なので、この場合、「衣装」を「度合いを測られる対象」として選択されているはずである。しかし、一般的には、「綺麗な衣装で」は項ではなく付加詞である。付加詞が ARGUMENT ではないとすると、(66)はここで提案する分析に対する反例に見えるが、実は格助詞付きの付加詞は ARGUMENT であるということをもとで述べる。もともと、ARGUMENT という概念は、(56e)と(57c)の違いに見られるように、連体修飾節の中の要素を述語に係る連用要素と区別することを意図したものである。格助詞付きの付加詞も、述語に係る連用要素なので、いわゆる項と同じ扱いになることは不自然な仮定ではない。

同様の例はほかにも多数見受けられる。たとえば、(67a)の「運ぶ」にとっては、「トラックで」は付加詞であり、(67b)の「走る」にとっては、「グラウンドで」は付加詞である。

- (67) a. 業者が荷物を大きなトラックで運ぶほど、効率がいい。
b. 広いグラウンドで走るほど、疲れる。

それにも関わらず、(67a)では、「トラックの大きさ」と「効率の良さ」が比例する解釈が可能であり、(67b)では、「グラウンドの広さ」と「疲れる度合い」が比例する解釈が可能である。

また、(68a)の「書く」にとって「ノートに」は付加詞である。(68b)の「叫ぶ」にとって、「友達に」は付加詞である。

- (68) a. 大きなノートに字を書くほど、疲れる。
b. 遠くの友達に叫ぶほど、苦勞する。

(68a)では、「ノートの大きさ」と「疲れる」が比例する解釈が可能であり、(68b)では、「友達の遠さ」と「苦勞する」が比例する解釈が可能である。同様に、(69a)の「買う」にとって「お店から」は付加詞であり、(70a)の「相談する」にとっても「事情」は付加詞であるが、それぞれの付加詞を「度合いを測られる対象」として選択する解釈が可能なのである。

- (69) a. 大きなお店から買うほど、品がそろいやすい。
b. ボールが高いところから落ちるほど、よくはねる。
(70) a. 生徒が複雑な事情について相談するほど、苦勞する。
b. 難しい提案について話しあうほど、時間がかかる。

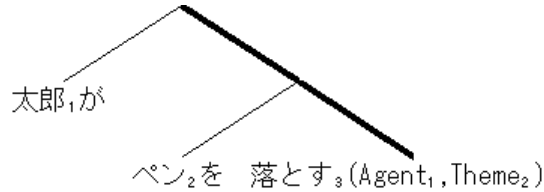
このように、格助詞付きの付加詞は、動詞に **Lexicon** で指定されている語彙的項と同じように、ホドに選択されうると考える必要がある。

一般に仮定されているように、動詞には、**Lexicon** において、どのような項 (**argument**) を取るかが定められており、それぞれの意味役割が指定されている。それに加えて、本論文では高井 (2009) に従い、動詞が持つ語彙的項の指定とは別に、ある要素が動詞の構造と **Merge** することによって統語的に組み込まれる項があると考えたい。具体的には、動詞が表す **event** の参与者を導入する要素 α が動詞と **Merge** する際に、動詞の項構造の中に α を項として組み込むと

いう統語的項関係を作る操作を仮定する¹⁰。たとえば、「落とす」という動詞は Lexicon で Agent と Theme の 2 項が指定されているだろう。

(71) Lexicon で指定されている項構造

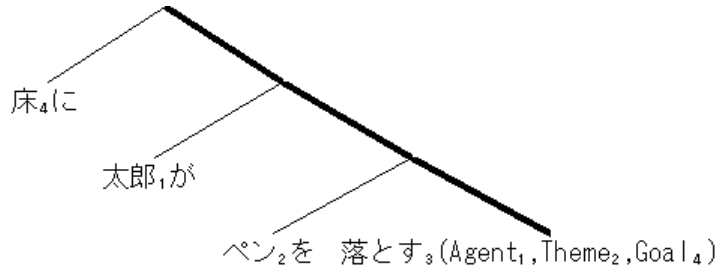
- a. 落とす (ガ/Agent, フ/Theme)
- b. 太郎₁がペン₂を落とす₃。
- c.



「落とす」は(71c)のように、「ペンを」と「太郎が」と Merge すると、「落とす」の項構造の意味役割をになう。ここで、「落とす」に語彙的項ではない「床に」が Merge すると、(72)になると考える。

(72) 「落とす」が「床に」とも Merge した後の項構造

- a. 落とす (ガ/Agent, フ/Theme, ニ/Goal)
- b. 床に₄太郎₁がペン₂を落とす₃。
- c.



つまり、「落とす」を主要部とする構成素と「床に」が Merge した結果、(72c)のように、「落とす」の項構造に新たに Goal が組み込まれるのである。

¹⁰ Parsons (1990)では、Event Semantics の立場から、当該の動詞の event に参与するものを並列的に扱う分析を挙げている。

(i) a. Brutus stabbed Caesar in the back with a knife. [Parsons 1990:13. A]
 b. (∃e) [Stabbing (e) & Subj (e, B) & Obj (e, C) & In (e, b) & With (e, k)]

[Parsons 1990:14. A']

これは、いわゆる項と付加詞の区別を行わないという点で、高井 (2009)および本論文の主張と同様のアプローチである。

本論文で提案した ARGUMENT という概念の基盤になっている「項(argument)」とは、語彙的項と統語的項の両方を含むと考えればよい。

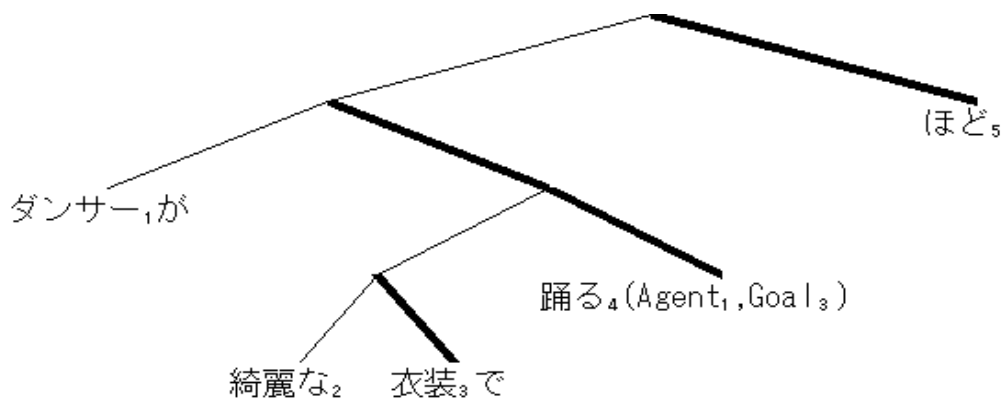
(73) 項(argument)

最終的に LF での項構造の中に含まれているものが argument になる。

(66)の「衣装」は「踊る」の統語的項である。

(66) ダンサーが綺麗な衣装で踊るほど、舞台が華やぐ。

(74) (66)の構造



「踊る」に語彙的項ではない「衣装で」が Merge すると、「衣装で」は動詞の項構造に新たに組み込まれる。「衣装」は、ホドの項の「踊る」の統語的項なので、ARGUMENT である。したがって、「衣装」はホドに「度合いを測られる対象」として選択されうるのである。

以上のように考えると、一見、反例であるかのように見えた(66)は本論文の提案に沿うものである。たとえば、(66)のホドの ARGUMENT は{踊る, 衣装, ダンサー} である。

(66) ダンサーが綺麗な衣装で踊るほど、舞台が華やぐ。

ホドが「踊る」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「踊る」の頻度のスケールで測られて、踊る度合いと舞台が華やぐ度合いが比例する解釈になる。「踊る」にとって語彙的項ではない「衣装」が、「踊る」に Merge すると、項構造に組み込まれて統語的項となるので、「衣装」は ARGUMENT である。ホドが「衣装」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「綺麗な」のスケールで測り、衣装の綺麗さの度合いと舞台が華やぐ度合いが比例する解

積になる。「ダンサー」も ARGUMENT なので選択されうるが、「ダンサー」を測るスケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、スケールの設定ができれば、これも解釈可能になる。

また、(68)のホドの ARGUMENT は {書く, 字, ノート} である。

(68) 大きなノートに字を書くほど、疲れる。

「書く」にとって語彙的項ではない「ノートに」が、「書く」に Merge すると、項構造に組み込まれて統語的項となるので、「ノート」は ARGUMENT である。ホドが「ノート」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「大きな」のスケールで測り、ノートの大きさの度合いと疲れる度合いが比例する解釈になる。

石居 (2008)では、(75)を「[+gradable]素性の浸透」という概念で説明した。本論文の提案に沿って考えると、(75)は統語的項によって説明されるべき現象である。(75a)のホドの ARGUMENT は {貼る, ところ, ポスター} である。

(75) a. ポスターを高いところに貼るほど、見えにくくなる。
b. ブローチを下の方に付けるほど、格好が悪い。

(75a)で、「貼る」にとって語彙的項ではない「ところに」が、「貼る」に Merge すると、項構造に組み込まれて統語的項となるので、「ところ」は ARGUMENT である。ホドが「ところ」を「度合いを測られる対象」として選択すると、「高い」のスケールで測り、貼るところの高さの度合いと見えにくくなる度合いが比例する解釈になる。「貼る」も ARGUMENT なので選択されうるが、「貼るほど見えにくくなる」が成り立たないために、選択されても解釈されない。「ポスター」も ARGUMENT なので選択されうるが、「ポスター」を測るスケールが設定できないため、選択されても解釈されない。しかし、スケールの設定ができれば、解釈可能になる。

このように、一見、反例に見えた現象も、本論文の提案に沿うものである。

5. おわりに

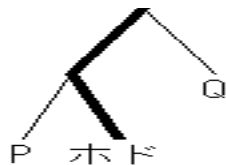
本論文では、比較相関構文の解釈は、ホドが ARGUMENT の中から「度合いを測られる対象」を選択することによって、構造的に決定されるということを示した。ホドが「度合いを測られる対象」を選択し、適切な度合いで測ると考えて初めて比較相関構文を説明することができるのである。

本論文の提案を再度まとめておく。

「P ホド Q」のホドは統語的には(43)のように Merge するが、P から Cause となる「度合いを測られる対象」を選択し、Q をその Result として選択することによって比較相関の解釈を生み出している。

(41) ホドは Cause と Result の項を取る述語である。

(43)



「度合いを測られる対象」の選択範囲は ARGUMENT という概念によって制限されている。

(61) ホドは、Cause の役割を果たすものとして、その ARGUMENT の中から一つ「度合いを測られる対象」を選択する。

(58) ARGUMENT

- a. 項(argument)をとる述語 P の項(argument)は、P の ARGUMENT である。
- b. X が Y の ARGUMENT であり、Y が Z の ARGUMENT であるならば、X は Z の ARGUMENT である。

(73) 項(argument)

最終的に LF での項構造の中に含まれているものを argument とみなす。

そして、選択された「度合いを測られる対象」を測るスケールはと(53)(54)の条件をもとに設定される。

(53) ホドが「度合いを測られる対象」として個物を選択した場合、スケールは言語表現としてあらわれているものに限られる。

(54) ホドが「度合いを測られる対象」として event を選択した場合も、その event に関わると理解される修飾要素がある場合には、それ

がスケールとなるが、何も言語表現がない場合には、量もしくは頻度のスケールが設定される。

このように考えることにより、比較相関構文の解釈を適切に導き出すことができる。ホドの選択対象の範囲を統語的に定めた上で、あとは文脈にまかせるという点では石居 (2008)と共通しているが、ホドが選択するものがスケールを表す要素ではなく、「度合いを測られる対象」であるとすることによって、記述的妥当性が達せられることを論じてきた。

4.1節では、比較相関構文の意味解釈の記述を試みた。ホドは、しばしば、ダケやクライなどと同じく、名詞起源の形式副詞であるといわれている¹¹。ホドと似た変遷を遂げてきた形式副詞の中には、比較相関構文のホドと類似した性質を持つものがある。

- (76) a. 太郎は食べるほど、働く。
b. 太郎は食べるだけ、働く。

また、ブンやワリニも似た性質を持つ。

- (77) a. 太郎は食べる分、働く。
b. 太郎は食べる割に、働く。

今後は、(76)や(77)など、ホドに類似した性質を持つ表現も分析していきたい。

参照文献

Beck, S, T. Oda and K. Sugisaki (2004) Parametric Variation in the Semantics of Comparison: Japanese vs. English. *Journal of East Asian Linguistics* 13: 289-344.

Bresnan, Joan (1973) Syntax of the Comparative Clause Construction in English. *Linguistic Inquiry* 4: 275-343.

Bresnan, Joan (1975) Comparative Deletion and Constraints on Transformations. *Linguistic Analysis* 1: 25-74.

¹¹ 江口 (2007)では、形式副詞段階→遊離数量詞段階→取り立て詞段階と進んできたバカリ／ダケ／クライに比べて、ホドはまだ形式副詞段階にとどまっていると主張している。

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (1999) The View from the Periphery: The English Comparative Correlative. *Linguistic Inquiry* 30: 543-571.
- 江口正 (2007) 「形式名詞から形式副詞・取り立て詞へ」青木博史(編)『日本語の構造変化と文法化』33-64. 東京: ひつじ書房.
- Grimshaw, Jane (2000) *Locality and Extended Projection*. In: Peter Coopmans and Martin Everaert (eds.) *Lexical Specification and Insertion*, 113-133. Amsterdam: J. Benjamins.
- Hayashishita, J.-R. (2009) *Yori-comparatives: A reply to Beck et al.* (2004). *Journal of East Asian Linguistics* 18: 65-100.
- 井本亮 (2000) 「連用修飾成分「ほど」句の用法について」『日本語科学』8: 7-28.
- 石居康男 (2008) 「日本語における比較相関構文について」金子義明他編『形式と意味のインターフェイス』248-258. 東京: 開拓社.
- Isii Yasuo (1991) *Operators and Empty Categories in Japanese*. dissertation, Connecticut.
- 川端元子 (2002) 「程度副詞相当句(節)「Pほど」について」『日本語教育』114: 40-49.
- Kennedy, Christopher (2002) Comparative Deletion and Optimality in Syntax. *Natural Language and Linguistic Theory* 20: 553-621.
- Kennedy, Christopher and Jason Merchant (2000) Attributive Comparative Deletion. *Natural Language and Linguistic Theory* 18: 89-146.
- Kikuchi, Akira (1987) *Comparative Deletion in Japanese*. ms., Yamagata University.
- 丹羽哲也 (1992) 「程度副詞における程度と取り立て」『人文研究』44 (13): 93-128.
- 野呂健一 (2008) 「動詞の反復表現「VにV」「VだけV」「VばVほど」について」日本語学会 2008 年度春季大会発要旨, 143-150.
- 奥津敬一郎 (1980) 「「ホド」一程度の形式副詞」『日本語教育』41: 149-168.
- Parsons, Terence (1990) *Events in the semantics of English: a study in subatomic semantics*. London: MIT Press.
- 高井岩生 (2009) 『スコープ解釈の統語論と意味論』, 博士論文, 九州大学.
- 上山あゆみ (2004) 「日本語の比較構文についての一考察」『文学研究』101: 45-67.

Ueyama, Ayumi (2010) Model of Judgment Making and Hypotheses in Generative Grammar. *17th Japanese/Korean Linguistics Conference, UCLA*, 27-47.

上山あゆみ (2011) 「統語論に基づく新しい意味理論の提案」 人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-B101, 35-40.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語』 東京：ひつじ書房.

The Structure and Interpretation of the Japanese Correlative Construction

TOJI, Yusuke
(Kyushu University)

This paper discusses the structure and interpretation of the Japanese correlative construction, as illustrated in (1).

- (1) [P Kireina dansaa ga odoru] hodo [Q butai ga hanayakani naru]
beautiful dancer nom dance HODO stage nom gorgeous be

The Japanese correlative construction is interpreted as "an element within the clause preceding *hodo* (henceforth P) that is directly proportional to the clause following *hodo* (henceforth Q)". It is worth noting that the construction in (1) may have ambiguous interpretations. For example, (1) has the following two interpretations: (i) the more beautiful dancers dance, the more gorgeous the stage is, (ii) the longer beautiful dancers dance, the more gorgeous the stage is. Ishii (2008) proposes that *hodo* chooses a scale syntactically to yield an interpretation of the Japanese correlative construction. The proposal based on a scale, however, is insufficient to account for the ambiguity. In contrast to Ishii (2008), this paper proposes that *hodo* syntactically chooses an object which is measured by a scale, and that the scale is determined pragmatically. This proposal can account for the ambiguity of the construction.

(初稿受理日 2012年2月29日 最終稿受理日 2012年7月12日)